

# 『玉勝間』初版本の流布について

杉 戸 清 彬

はじめに

『玉勝間』に現行流布の多くの版本や活字本とは異なる章段を有する、ごく初期の版本（以下「初版本」と呼ぶ。）が存在したことは以前拙稿で紹介したことがある。（註1）本稿では、その後にご教示を得たり管見に入ったりした『玉勝間』初版本関係資料について報告し、併せて本居宣長の後に登場した国学者達の間においても流布本との相違が問題になった例があることを述べてみたい。

—

書簡が翻刻され、そのなかに次のような一条項がある。なおこの記事の存在については愛知県立大学の尾崎知光教授からご教示を得た。記して御礼を申し上げる。(翻刻本の改行は「」で示し、且つ本稿でも改行する。)

一 玉かつまたちばなの巻、一枚には「

神武天皇の御さ、ぎにとかへよといふ詞といふ條あり、さるヲ一板には、儒者孔丘を尊こと過て、周公を尊ぶこと」

たらずといふ論、また周公孔丘孟軻といふ條とかはり御座候とは、何れが前板にて、

翁の御心にあかずおもほし候事ありて、かへられ候ものと奉<sub>レ</sub>存候、何れが後の定説か、御きかせ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。」  
右の引用中「一枚」の脇に「(ママ)」としたのは稿者であり、「一板」の誤りと思われるが、「とかへよ」の脇に「マ、」とあるのは『平田篤胤研究』の翻刻通りである。版本の字形を見ても「とかた」としか読めず、編者渡辺刀水も不審とせざるを得なかつたのであろう。篤胤の誤記と推定しておきたい。

さて一読して分かることだが、右の文章にはおそらくは混乱がある。「何れが前板にて」と「何れが後の定説か」は本来連接していたであらう。翻刻にも見られるように「翁の御心」云々が改行されているのは、師と仰ぐ宣長への敬意を表わすものであるが、それにつれて生じた前行下部の空白がこのような混乱を生じさせたものでもあろうか。大平宛のこの篤胤書簡は所蔵者が記されておらず、編者の「例言」に依ればそれは所蔵者が不明ということであり原文を直接確かめることはできないが、元の文章は「また周公孔丘孟軻といふ条とかはり御座候とは」の下を欠字とし、改行して「翁の御心にあかずおもほし候事ありて、かへられ候ものと奉<sub>レ</sub>存候、何れが前板にて、何れが後の定説か、御きかせ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。」となっていたのではないだろうか。今は仮にそのように理解しておきたい。

いずれにせよ、篤胤が『玉勝間』の「たちばなの巻」(第三巻に当たる)に見える「神武天皇の御陵」及び「とか

たといふ詞」の二章段の代わりに、書簡中の表記に従えば「儒者孔丘を尊こと過て、周公を尊ぶことたらずといふ論」及び「周公孔丘孟軻」と呼ばれるような章段をもつ版本を見たこと、どちらの形が「前板」で、どちらの形が「後の定説」であるのかを大平に尋ねていること、その改訂が宣長の意思に依ると推察したこと、以上三点が明らかになる。

ここで嘗て発表した拙稿<sup>(註2)</sup>の結論を要約して紹介すれば、『玉勝間』初編（巻一―巻三）の版本が完成して宣長の手元に届いた寛政七年六月の時点では、問題の箇所は「儒者孔子を尊むこと過て周公を尊むことたらずといふ論ひ」及び「周公旦孔丘孟軻」の二箇条であり、その形で出版されたのだが、同年十月九日には、門人でもあり版本師でもあった植松有信に対し、右二箇条の彫り替えを書状で指示している。それはやや激しきに過ぎると思われる儒学批判の文言への公的な咎めを慮つてのことだったが、その際に置き換えられたのが「神武天皇の御陵」及び「とかたといふ詞」の二章段であるというものであった。

篤胤は右のような事情を知らず疑問をもって大平に質した。「翁の御心にあかずおもほし候事ありて、かへられ候ものと奉<sub>レ</sub>存候」と記すように、僅か二箇条に過ぎぬこととして看過することなく、宣長の「定説」を求めたのである。大平がどのように答えたか、返書の内容は管見に入らないが、東京大学文学部国文学研究室所蔵の本居文庫本『玉勝間』が改訂以前の本文であることからすれば、大平は篤胤の疑問に十分答えることができたのではないかと想像されるのである。

二

長崎県立長崎図書館所蔵の諏訪神社文庫本の中に、中島広足旧蔵の版本『玉勝間』十五冊があり、その中に書き込

みと付紙が見られることを発見され、稿者に知らせてくださったのは、帝京大学の岡中正行氏であった。氏にも御礼を申し上げたい。

その版本『玉勝間』三の巻第十七丁裏の匡郭外上欄には朱の書き込みがあり、それは次の如くである。(次頁の写真参照。句点及び濁点は稿者。)

はじめの本には此条ととかたの条なくして付紙の二条あり。こは後彫かへられしものなるべし。

右の書き込み中の「此条」は書き込みの真下にある「神武天皇の御陵」の条を指し、「とかたの条」は「とかたといふ詞」の条を指す。この二条が改訂後のものであることは言うまでもない。また、「付紙の二条」とは、書き込みのある第十七丁裏と見開きの関係になる第十八丁表の匡郭外右の所にその右端を貼付され、左方に展がるようになっている横長の別紙に墨書された「儒者孔子を尊むこと過て周公を尊むことたらずといふ論ひ」及び「周公旦孔丘孟軻」の二条である(写真参照)。その本文はきわめて正確に写されていて、二箇所に見られる一文字ずつの書き落としても傍らに正しく補われている。敢えて指摘すれば「国俗」という言葉に付された「クニブリ」というルビが落ちていたのだが、特に問題にしくなくてもよいであろう。

朱の書き込みと付紙は共に広足のものと考えられるが、広足が簞胤と異なるのは、「はじめの本」には「付紙の二条」があったが、後に彫り替えられて自分が所持する版本の形になったことを承知していると思われる点である。又、「彫かへられし」の「られ」が宣長に対する敬意を表わすと見てよいとすれば、その改訂が宣長の手で為されたと推定しているのである。

それでは広足手沢の諏訪神社文庫本はいつの時期の版本であるのか。『玉勝間』は三巻ずつ五回に互って出版され、三・六・九・十二・十四のそれぞれの巻に刊記を持つのが基本的な形と考えられる。その中でも三の巻の刊記には三

18才 及び付紙

[illegible]

種類のものが見られることは既に旧稿で述べた所であるが、相違点はそこに名前の載る書林にのみ関わる。旧稿に従って第一種から順に書林名とその所在地を示すと次のようになる。

〔第一種〕 藤屋吉兵衛（名古屋）／伊豆田屋瀬三郎（松坂）／柏屋兵助（松坂）

〔第二種〕 蔦屋重三郎（江戸）／伊豆田屋瀬三郎（松坂）／柏屋兵助（松坂）／藤屋儀助（名古屋）／藤屋吉兵衛（名古屋）

〔第三種〕 蔦屋重三郎（江戸）／河内屋喜兵衛（大坂）／河南四郎兵衛（京都）／伊豆田屋瀬三郎（松坂）／柏屋兵助（松坂）／藤屋吉兵衛（名古屋）

右の書店名と所在地及び当時の出版事情などを考え合わせると、第一種の刊記を有するものは尾州書林仲間の結成後間もなく名古屋で出版され、第二種の刊記を有するものはその後江戸本屋仲間の了解を得て販売され、第三種の刊記を有するものは改彫後におそらくは大坂本屋仲間の認知を受けて売り出されたものと推定されたのである。

諏訪神社文庫本三の巻の刊記は最後の第三種のものであり、この刊記を持つ版本は今のところ他にはお茶の水図書館所蔵旧成簀堂文庫本しか伝存を知らず、その意味でも貴重な伝本と言えよう。大阪で売り出された本は今述べたように改彫後のものと考えられ、発売も他のものより一年以上は遅いと推定される。広足は改訂後の本文を持つ版本を手に入れたのだが、その後その本には見られない章段をもつ初期の本があることを知り、その該当箇所について書き込みと付紙への筆写を行なったものと思われるのである。

諏訪神社文庫本について付け加えておきたい。印記から推定されることなのであるが、広足が所持したのは第三篇、即ち九の巻迄であつただろう。岡中氏が紹介された広足の蔵書印の内、「広足／印章」と二文字ずつ二行に陰刻された二種角の方形印が一／九の各冊第一丁表匡郭内右下角に捺されているのに対し、十／十四及び別冊の「玉勝間目録」

の各冊第一丁表にはそれがなく、代わりに「青木蔵書」と一行に記された長方形印が捺されているのが、そのように推定する根拠である。この印については、広足と共に長崎の三歌人と称された人に諏訪神社宮司の青木永章・近藤光輔なる人物が居た由であるから、その青木永章に関わるものとも考えられる。

印記はこのほかに「長崎／諏方神社／文庫」と刻された円形印、「明治三十二年十月／國幣小社諏訪神社／献本宮司中島廣行」と刻された方形印が全冊に捺されていて、この長崎図書館所蔵本『玉勝間』の伝来を示している。中島広行は広足の養子としてその学統を嗣いだ人であった。

三

国文学研究資料館で閲覧できる紙焼き写真本の中に、高知県立図書館所蔵山内文庫本の写本「玉かつま拔書」（『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録縮刷版6』の見出しに従う。）がある。外題は「玉賀都萬拔書 全」、本文第一丁の初めには「玉賀都萬一の巻 ぬきがき」と記す。原本は縦二十七糎、横十九糎、墨付三十九丁の袋綴本で、『玉勝間』から四十の章段を抜き書きしたもののだが、そのなかに本稿で問題にしている二つの章段「儒者孔子を尊むこと過て周公を尊むことたらずといふ論ひ」及び「周公旦孔丘孟軻」が見られるのである。誰の筆記になるものか全く分からないのだが、儒学を批判するような立場から章段を選んだことは次に掲げる奥書からも明らかであろう。（句読点は稿者。）

玉勝間九の巻の内、儒者の腹立事のみそこ、書出しつ。論つろひは漢意の深きと浅きとにあらんかも。

なにか儒者を挑発するような文言であるが、このようなことが言える環境があったことも教えてくれるのである。

執筆時期に關しても何の記述も見られないので不明とせざるをえないが、宣長が削除した項目を特に選んで取り入れているのは、抜き書きの基になった『玉勝間』がその記事を持っていたという偶然性もあるうが、その当時における当該記事の印象の強さも一つの要因だったのであろう。

本文を版本と比較すると、字体も同じにするよう努力したようである。「とりなほして」を「とりなをして」としたり、助詞の「を」を書き落したり、行移りに4か所の違いがあつたりはするが、基本的には版本からの写しであると判断される。

抜き出した章段は左記のごとくである。

わたくしに記せる史／儒者の皇国の事をばしらずとてある事／もろこしぶみをもよむべき事／学問して道をしる事／がくもん／からごゝろ／漢意／又／漢国に殷人鬼神をたふとむといへる事／から国の官神事と喪事とをかね行ふ事（以上一の巻）

両部唯一といふ事／道にかなはぬ世中のしわざ／道をおこなふさだ／から国聖人の世の祥瑞といふもの／神典のときざま／神祇の歌／風雅集の歌／あらたにいひ出たる説はとみに人のうけひかぬ事／又／おのが物まなびの有しやう／あがたるのうしの御さとし言／おのれあがたるの大人の教をうけしやう／師の説になづまざる事／わがをしへ子にいましめおくやう（以上二の巻）

から国にて孔丘が名をいむ事／から人のおやのおもひに身をやつす事／富貴をねがはざるをよき事にする論ひ／儒者孔子を尊むこと過て周公を尊むことたらずといふ論ひ／周公旦孔丘孟軻／神の御ふみをとける世々のさま（以上三の巻）

世の人かざりはからるゝたとひ／仏の前のもり物のたとへ／もろこし人の説こちたくくだ／しき事（以上四



の巻

熊沢氏が神典を論へる事／あやしき事の説／また／漢籍と神御典とのけぢめ／業平朝臣のいまはの言葉（以上五の巻）

おのれとり分て人につたふべきふしなき事／もろこしの老子の説まことの道に似たる所ある事（以上七の巻）

先に引用した奥書によれば、九の巻までの範囲で「儒者の腹立事のみ」即ち反儒学的な内容の章段ばかりを抜き出したということであつたが、六・八・九の各巻からは採っていない。この章段の題目を見て思い合わされるのは「第一次玉勝間」のことである。「第一次玉勝間」とは、これも嘗て拙稿で取り上げたが、現在見られるような論説や考証あるいは随想や抄録・抜き書きなどの多趣多様な記事が渾然一体となつてゐるような趣の著作である『玉勝間』とは全く構想の違ふ宣長の未定稿本であり、自己の学問的な立場を儒仏批判や古学の伝統といった面から確認しようとした章段を中心にしたと考えられるものであつた。それは結局一編の著作として結実することはなかったが、そのなかの記事の多くは、新たな構想で編纂されていった現行『玉勝間』に取り入れられている。そのような、もとは「第一次玉勝間」に書き記された記事の中の様々な章段が、山内文庫に書き抜かれた項目の半数以上を占めてゐるのである。宣長が「第一次玉勝間」で意図したことは、構想を改めたはずの『玉勝間』が山内文庫のような姿勢で読まれることによつて図らずも実現したということができようであらう。『玉勝間』がどのような面から評価されていたのかを知る一資料としても山内文庫本の持つ意義は大きいと思ふのである。

この山内文庫本で留意しておきたいことは、この抜き書きが十の巻以降の無い状態で行なわれたと考えられることである。九の巻までは刊記に従えば寛政十一年二月までに出版されたが、続く第四編（十二の巻まで）が出たのは享和四年のことであつた。また、全十五冊が揃うのは文化九年である。改訂以前の章段を採っているのだから当然のこ

とであるが、この抄出本の基となった九冊の本の内少なくとも第一篇（つまり三の巻まで）については出版後あまり間を置かずに購われたと思われるのである。誰が買い求めたのか知る術もないが、宣長の学問に強い関心を寄せていた人物であるとしてよいであろう。先にも述べたように書写の時期も分からないし、書写した人も購入した人とは別人であるかもしれない。しかし奥書の「玉勝間九の巻の内」という書き方からすれば、十の巻以降は未だ出ていないか、もしくは手許には無かったとしてよいと考えられる。書き抜かれても良いような記事は十の巻以降にもあると思われるのである。

#### 四

これまで述べてきたように、孔子や周公に関わる記事を持つ初版本の存在を示す資料は、旧稿において紹介した五つのもののほかに本稿で三つのものを加えることができた。八つの資料のうち、版本の形で初刻の形態を直接伝えているのが、先に触れた本居文庫本のほか、田中大秀旧蔵の高山市郷土館所蔵荏野文庫本・伴信友旧蔵の小浜市立図書館蔵酒井家文庫本・井上頼因旧蔵の無窮会図書館蔵神習文庫本、以上四本。書写された形で伝わったのが東京大学付属図書館所蔵南葵文庫旧蔵本・高知県立図書館所蔵山内文庫本の二本および長崎県立図書館所蔵諏訪神社文庫旧蔵の中島広足の筆記に依る付紙。そして間接的な形ではあるが当該記事の存在に触れているのが平田篤胤の書簡ということになる。このうち南葵文庫旧蔵本は、宣長の門人で筑前国夜須郡の大穴牟遲神社神主だったと推定される伊藤大蔵（オオサカ）が何らかの形で関係したと思われる写本である。

右の諸資料を見て結論的に言い得ることは田中大秀・伴信友・中島広足・平田篤胤・伊藤大蔵及び本居大平などは

初版本の存在を知っていたのであり、中でも広足と篤胤はその改訂にも関心を持ったことである。又、大平はそうせざるを得なかった経緯をも承知していたのではなかったろうか。反対に大秀や信友、また伊藤大蔵は改訂のことを知らなかった可能性がある。彼らの関わった本に改訂後の記事への言及が全く見られないからである。神習文庫本・山内文庫本について言えば、神習文庫本は井上頼因以前の伝来が明らかでなく、山内文庫本も由来が分からないのだが、この二つの伝本に関係した人達も初版本を見たのである。しかし、彼等にしても改訂のことを知ったかどうかは不明とせざるをえない。

以上、まことに些細な報告であるが、ご教示を下さった方々、及び資料調査でお世話になり本誌への発表についても御了解を賜った長崎県立長崎図書館と国文学研究資料館の関係者各位に感謝しつつ結びとしたい。

# 注

- (1) 「『玉勝間』の初版本とその刊行」(後藤重郎教授停年退官記念国語国文学論集) 昭和五十九年四月 名古屋大学出版会
- (2) 「『玉勝間』の版本に関する一考察——本居文庫本『玉勝間』について——」(国語と国文学) 昭和五十四年三月号
- (3) 注(1)に同じ。
- (4) 岸雅裕氏「尾州書林仲間の成立と三都——尾州書林の台頭——」(文学) 一九八一年十一月 特集《出版Ⅰ》
- (5) 「江戸本屋出版記録」(ゆまに書房)に拠る。注(1)の拙稿参照。
- (6) 「大坂本屋仲間記録」第二卷「出勤帳」に拠る。注(1)の拙稿参照。
- (7) 「中島広足関係書目・資料解題(その一)」(帝京大学文学部紀要 国語国文学) 第十七号 昭和六十年十月
- (8) 「日本古典文学大辞典」(岩波書店刊)「中島広足」の項。
- (9) 数値は国文学研究資料館のご教示による。
- (10) 「『玉勝間』の成立について」(名古屋大学国語国文学) 第33号 昭和四十八年十二月) 及び筑摩書房版『本居宣長全集』

別巻一の大野晋氏による解題参照。

(11) 注(1)に同じ。

〈付 記〉

本稿校正中の昭和六十二年十一月三十日に筑摩書房から待望久しかった『本居宣長全集』第十七巻書簡編が刊行された。その中の書簡番号三六九「寛政七年十月九日 植松有信宛」書簡の補注(全集六五六―六七頁)において、初版本にあった二つの記事、すなわち「儒者孔子を尊むこと過て周公を尊むことたらずといふ論ひ」及び「周公旦孔丘孟軻」の二箇条が翻刻された。以上、付記する。